



旅するまちなみ / Community on the move はアーティスト・高浜利也がここ数年継続しているプロジェクトである。これまでに新潟県十日町市立清津峡小学校(2006)、新潟県十日町小出集落(2007)、愛知県愛知郡長久手町(2007)、愛知県名古屋市民ギャラリー矢田(2007)、東京都台東区立旧坂本小学校(2007)、北海道根室市落石岬(2008)、岡山県姫路市立美術館(2008)、東京国立博物館・柳瀬荘/久木庵(2008)、東京都目黒区立美術館(2009)、長野県軽井沢・脇田美術館(2009)で開催されてきた。

このプロジェクトは一時的な床の構築と、移動する大量の積み木、床と積み木によって成立する出来事、という三つの要素で構成されている。まず、高浜は床の構築に対して非常に高い意識を持っている。その素材、大きさ、形状などはその場に応じた方法が模索され、その土地の歴史や風土、生活様式なども色濃く反映される。特徴のない中立的な「場」を前提とするのではなく、生活感覚の延長線上にある「場」を現地での協働・交感によって作り上げていく。「床」は積み木を用いたワークショップのための土台であり、いわば内容物のための「台座」にすぎないはずなのだが、彼はこの台座に対して意識的に物質性や生活感、社会性や歴史性を付与していく。従来の中立的かつ透明な台座を積極的に「社会彫刻」の主役に据える試みと言えるだろう。

大量の積み木は各地を移動してきたものだ。それぞれの土地で新たな積み木が加わり、回を重ねるごとに増殖していく。この積み木を用いて、ワークショップ参加者は「まちなみ」を作る。ところで積み木というのは、普遍性と特殊性、自由と不自由、可能性と不可能性、有限性と無限性、恒常性と一時性が絶妙のバランスで拮抗し、その拮抗自体を楽しむことにその本質がないだろうか。私たちが住んでいる「まち」という環境を積み木で再現しようとする際、ここでは、完全に再現することの断念、特色や特徴の誇張、存在しないものの現出、街そのものの変形可能性の模索、理想のまちなみへの志向などが複合的に立ち現れるはずだ。それは、いつしか物質的現実を越え、心の動きや、気持ちの風向き、精神的な距離感、生理的な地理、などを反映することになる。架空の、来るべき共同体を一時的に、協働的に構築することに、このプロジェクトの要点があるのだ。そして、その「まちなみ = community」は再び積み木となり、断片化された記憶として次の土地へと運ばれていく。

今回の移動計画は滋賀県琵琶湖西側の山奥にある集落「椋川」での開催となる。ほんの30世帯60人ほどからなるこの集落のさらに奥に、かつて小原谷という4世帯だけの集落があった。高浜は今回、廃墟となったその集落の姿に大きな衝撃を受け、そこからプロジェクトを構想しはじめた。人工の杉林に覆われたその廃墟は、失われた共同体であると同時に、自然や社会の状況に応じて移動し、変形していく共同体のありようも示しているだろう。彼が築く「床」の上に、その動的な共同体のありようが、一時的に、そして鮮やかに顕現することを黙って見守ろうと思う。

遠藤水城 [キュレーター/本展コーディネーター]

移動計画 / 椋川

COMMUNITY ON THE MOVE / MUKUGAWA

アーティスト: 高浜利也

2009年9月11日(金)~13日(日) 13:00~18:00
主催: 日本財団APIフェロシップ 問い合わせ: endomizuki@hotmail.com, 070-5015-5646 (遠藤) ※会期中は携帯電話および普通電話もつながらないことが多くなります。事前にお問い合わせください。

※9月13日に積み木を用いたワークショップを開催します。



小原谷のこと

「まっすぐ行って、橋のとこに着いたら、今度は左の山道に入ってそのまま道なりや。20分も歩いたら左側の谷下に見えてくるやろ。」地元の方にそれだけ聞いて小原谷に向かい、本当に集落の「跡」が分かるのだろうかとか半信半疑に思いながら進んでいくと、果たして、薄暗い杉林に囲まれた谷底に不釣り合いなくらい眩しい日差しを浴びた「遺跡」が突然現れた。



限界集落ということばが適切であるかどうかは別にして、その限界をはるかに越えて、すべてが朽ち果て、森に還ってゆくという現実を目の当たりにしたこと自体はじめてだったし、軽いショックでもあった。また、自然の成り行きさえも遮り、断ち切ろうとする杉林の存在が否応なしに視界に飛び込んでくることにも戸惑いを覚えた。それは環境や生態上の異物としてだけでなく、色彩の違和感でもあったからだ。

全四戸をまかなうための水力発電や炭焼き、田んぼ、畑作、養蚕、山菜採りなどによる自給自足の生活。今、人類が最先端の知識と莫大な費用をかけて実現しようとしているエネルギーや食料などの循環システムの理念が廃村になる以前の小原谷で、すでに実践されていたという事実。現代社会が夢見る理想郷の雛型が、かつて、そこに存在した痕跡を掘り起こし、検証することはアカデミシャンたちに委ねよう。ただ、すべての

ものが朽ち果て、あるべき姿に立ち返るという必然の途上にある小原谷の「跡」で感じた違和感、すなわち、杉林の存在の意味を美術の立ち位置で炙りだし、問いかける作業は引き受けるつもりだ。

高浜利也